

河口慧海とチベット文献

東洋文庫研究員
筑波大学講師 吉水 千鶴子

河口慧海（一八六六一一九四五）は、サンスクリット語とチベット語の仏典を求めて、一九〇〇年に日本人として初めて中央チベットに到り、約二年間滞在した。さらに一九一四年再度のチベット訪問、インドやネパールでの滞在中に仏経文献のみならず、仏具、仏像、絵画などの美術品から動植物の標本にいたるまで幅広く収集、鋭い観察眼によって白らが見聞したことを報告し、またチベット語、サ

ンスクリット語、ネパール語を学び、仏典を翻訳するなど、仏教学、チベット学、ひいては民俗学、登山、探検の分野においても多大な功績を残している。彼が収集した文献のうち、何種類かのチベット語大蔵経と蔵外文献は東洋文庫に寄贈され、世界屈指のコレクションとして知られ、今日も世界中の研究者に利用されている。慧海は最晩年を東洋文庫に通い、蔵和辞典の編纂に着手するなど、文庫との縁はたいへん深い。本講演は、慧海のチベット行きの歴史的背景と、東洋文庫所蔵の河口コレクションの現代的意義、すなわち現在の仏教学チベット学研究への具体的な貢献に焦点をあてるものである。

河口慧海は一人でチベット行きを決意し、最初はいかなる宗派や組織の援助も受けずにそれを実行したが、彼がチベットを目指した背景には、明治になってヨーロッパから輸入された、原典に基づく仏教研究という近代仏教学の推進と、ヨーロッパ帝国主義のアジア進出にともなう日本の大陸戦略という大きな動きがある。漢訳大蔵経による經典研究では不十分だという認識のもと、日本の仏教界は、ヨーロッパの研究者に倣って、ネパールやチベットにサンスクリット語写本とチベット語の大蔵経を求めて活動を開始しようとしていた。井上円了が設立し、日本の近代仏教学の祖ともいえる南条文雄が講師を勤める哲学館で学んだ慧海

は、こうした新しい知識にもとづいて、自ら原典を求めてチベット行きを決断したのであった。同時期に浄土真宗もチベットへ能海寛、寺本婉雅を派遣したが、いずれもチベットに入国できず、慧海が最初となった。ヨーロッパにおけるインド学仏教学の発展と写本収集による原典研究を飛躍的に促進したのは、イギリス帝国のインド支配である。それは慧海をチベット行きに動かさせた仏教学の新しい動向を生み出すと同時に、一方で弱体化しつつあった中国の清朝と、その清朝に依存してきたチベットというヒマラヤの小国を脅かし始めた。日本はヨーロッパ列強と競うように、日清戦争で国威発揚し、時代の流れに乗ろうとしていた。歴史的に深い関係にある中国と、新たに南下してきたロシア帝国、そしてインドを植民地支配するイギリスの帝国主義の利害の衝突に巻き込まれ、翻弄されていたチベットは、慧海が目指した当時、反イギリス政策をとって、外国人に対しては厳しい監視を課し、もしスパイだと疑われれば投獄、死刑の危険もあった。ゆえに能海や寺本はチベット入りを果たせず、慧海も、ネパールから西チベットへ出るヒマラヤ山中の困難な間道を進まざるを得なかったのである。

周到な準備と類希な意志の強さ、英断によってこの困難な旅を成し遂げた慧海は、日本人であることを隠して、ラサのセラ僧院の学僧となる。一九〇二年に正体が発覚して

脱出するまでのこの時の体験を記したのが、『チベット旅行記』である。彼はその後も再度ネパール、チベットを訪れ、またたびたびパンチェンラマ六世と会い、仏典の収集を継続する。彼が請求したチベット語文献は、当時の日本ではまったく新しいもので、その功績は賞賛された。今日では、多くの文献が各地で自由に使えるようになり、インターネットを通じても入手できるようになったが、河口コレクションの重要性は決して薄れてはいない。その中でもとくに彼がドライバー三世より拝受した、ギャンツェからもたらされた写本大蔵経は、手書きの写本であり、世界で唯一閲覧可能なギャンツェのテンパンマ系の写本として、世界の研究者の注目を集め、チベット大蔵経の歴史を解明する大きな手がかりを提供してきたのである。

チベットで大蔵経の編纂が始められたのは一四世紀初頭であるが、歴史資料に基づいて、それがナルタン寺で行われたことがわかっている。その最も古い大蔵経の経部のナルタン写本を転写して、ツェルバ写本、テンパンマ写本という二系統の写本が作られた。そこからそれぞれ東チベット系、西チベット系の写本が、校正、改訂を加えられ、現在利用されている木版印刷による(新)ナルタン版、デルゲ版、チヨーン版、北京版として出来上がっていったが、これら新しいものは校訂を重ね、翻訳語も新しいものが用

いられ、相互の違いも少なくなっている。しかしながら、もとの古いナルタン写本の姿からは遠いといわざるを得ない。それに対して、慧海請求の写本大蔵経は、書写された年代こそ一八五八―七八年と新しいが、それは古いナルタン写本からの転写であり、編纂された当時の面影を伝えるものである。実際、収録される経典や、用いられる語句には、新しい木版本と大きな違いがある。一九八二年、この写本大蔵経が、ウランバートルにあるもうひとつのテンパンマ系の写本大蔵経ときわめて似ていることが発見され、同じ元本からの転写であることが推測されている。こうして西チベットのギャンツェには、古いナルタン写本を転写したテンパンマ系の写本が伝えられていることが明らかにになり、チベット大蔵経経部の歴史的發展がかなり正確に跡付けられることとなった。また、この写本を用いることで、より古い翻訳を知ることが出来るため、個々の經典の研究には、この写本を参照することが欠かせなくなっている。慧海の時代から見れば、大きな進展をとげた仏教学であるが、彼のコレクションの中にはいまだ研究されていないものもたくさんあり、将来にわたってチベット学仏教学に役立つことは疑い得ないし、また役立てていかねばならないのである。